

# テロ特措法案への賛否

# 「国の姿」くっきり

安倍 晋三・官房副長官



テロ対策特別措置法案が、自衛隊を初めて「戦時」に「他国の領土」へ派遣する道を開く。戦後の安全保障論議の曲がり角で、賛否に分かれた戦後世代の2人の代議士の思いと行動をたどった。推進役の前線にいた安倍晋三官房副長官(47)と、反対の論陣で目立った辻元清美社民党政審会長(41)。2人の視線の先に、それぞれの「国のかたち」が浮かび上がる。(坪井ゆづる、矢部士彦)

## 同時テロ 危機と日本

「まだ理解していただけると、いちどの望みを持っている」  
安倍氏は無念の表情だった。15日夜、小泉首相と民主党の鳩山由紀夫代

## 貢献、自衛隊以外で

## 不戦が信念 危険は覚悟

表との党首会談が決裂。野党との修正協議がご破算になった。  
官房副長官は首相官邸と与党との調整役だが、安倍氏は野党との折衝役も果たした。時には携帯電話で、時には議員会館に足を運んで、若手の民主党議員らと連絡し合った。与党執行部に民主党案の受け入れを求めて談判もした。安保政策は、できるだけ広い支持を得なければならぬ。そう考えるからだ。

祖父は「60年安保」の岸信介元首相。条約発効と引き換えに退陣した姿が、幼心に焼き付いている。父・晋太郎元外相の秘書官として政治家を志したころに、祖父からいわれた言葉を大事にして

「正しいと思う政策をやる時は、断固とした決意を持たなければならぬ」  
政府中枢で日本の国際「イッタイカ」は日本貢献を練る立場のいまはなおさらだ。

9月下旬、ワシントン。大統領との会談のために訪米した小泉首相に「こんどは『イッタイカ』をどう考えるのか」「イッタイカ」は日本語だった。「後方支援は武力行使と『一体化』であってはならない」という日本の「常識」が、世界に通用しないことを実感した。帰国後、法案づくりの作業を急いだ。

自衛隊が国際貢献で世界に向いて、汗をかく。そんな「国の姿」を実現させたかった。  
自衛官から最近、言われた言葉が耳に残る。

「政治家も危険なところに出すんだと腹をくくってほしい」  
政治家は国民の「死」と向き合わなければならぬ。だから、首相にも「覚悟」を求めた。



辻元 清美・社民党政審会長

委員会議、新聞投稿、インタビュ、テレビ

「米軍の食糧投下は、子どもが取りに行くと地雷の被害が増える可能性があるからやめてほしい」

「国会議員になると、心にとろつたのは『戦争をさせない』ことだったんです。それなのに……」。採決の重みに言葉を失った。

## 世界の「常識」に沿う

毎日、約100通のメールが届く。自衛隊員の妻から「テロ特措法は契約違反です。専守防衛だったはず」との訴えもきた。

安倍氏とは、9月下旬にテレビで論議した。安倍氏が日本の貢献を「ナイチンゲール」にたとえ

「ナイチンゲールは中立の立場ですよ。人道支援の砂糖菓子で法案の危うい部分を隠そうとする言い方やわ」

探るつもりだ。